

平成23年12月15日発行

北海道国際理解教育研究協議会

会 長 中村 淳
事務局長 古里 和雄

会報 第80号

第32回北海道国際理解教育研究大会上川・旭川大会を終えて

上川・旭川大会実行委員長

藤 崎 良 二

(上川管内国際理解教育研究協議会会長)

全道各地の会員の皆様のご協力のもと、10月7日と8日の二日間にわたって、第32回北海道国際理解教育研究大会上川・旭川大会、第21回全国海外子女教育・国際理解教育研究協議会北海道ブロック大会を、旭川藤女子高等学校を会場に無事終了することができました。

北海道第10次研究の1年次として研究に取り組み、本研究大会において一定の成果と課題を提示することによって、初年度としての役割を果たすことができましたことを、実行委員会の会員の皆様と喜び合うとともに、全道各地から参加された会員の皆様をはじめ、関係各機関の皆様にご心よりお礼を申し上げます。

これからの日本社会は、一層グローバル化が進み、複雑に絡み合った各国の相互依存、多文化共生の時代が間違いなくおとずれようとしています。そのような中で、育ちゆく子ども達が、たくましく、広い視野で物事を考え、しっかりとしたアイデンティティをもって他者とつながることや、主体的に行動する力をつけることは、今後ますます重要になってきます。まさに、私たちの研究は、時宜を得た研究であり、私たちの組織は、国際理解教育の必要性を広く周知する役割を担っているものです。

上川・旭川大会では、北海道の国際理解教育研究協議会の基本姿勢でもある授業公開を中心に、過去の上川・旭川の研究大会の実績をふまえつつ、いつでも・どこでも・だれにでもできる国際理解教育の推進、幼稚園から大学まで、学齢に応じた国際理解教育のあり方を柱に大会の準備をすすめ、提言させていただきました。

そして、副主題に掲げられている、「自信をもって主体的に行動する力を育む」授業研究として、学齢に応じ、行動化のみられる外国語活動や英語科の授業、行動化につながるJICAと連携した授業やESDの考え方を取り入れた授業を提案いたしました。

また、二日目の課題別分科会では、全道各地の会員の皆様から貴重な実践発表がなされ、どの分科会においても熱心な討議がなされましたことを大変うれしく思います。さらに、講演では、南極越冬隊員として参加した旭川工業高等専門学校の前崎睦先生から、地球環境の鍵を握る南極の貴重なお話をいただき、南極から発信する共生について学ぶことができました。

ご後援をいただいた、文部科学省、海外子女教育振興財団、北海道教育委員会、上川教育局、JICA札幌をはじめとする、道内各教育関係機関、教育団体、そして、会場を提供していただいた旭川藤女子高等学校の皆様へ、心よりお礼を申し上げますとともに、本大会にご協力、ご尽力いただきました会員の皆様へ感謝を申し上げます。

来年度、帯広市において開催される全道大会において、今年度の実践と分科会での討議内容を生かし、北海道の国際理解教育の研究をさらに積み重ね発展させていただければ幸いです。帯広大会が充実した大会になりますことを心よりご祈念申し上げ、本大会を終えてのお礼とさせていただきます。

理事会総会・研修会

第21回全国海外子女教育・国際理解教育権協議会北海道ブロック大会、第32回北海道国際理解教育研究大会 上川・旭川大会に先立ち、平成23年度の理事会総会と研修会が開催されました。

理事会総会では、全国海外子女教育国際理解教育研究協議会会長の滝多賀雄様も来賓としてご参加いただき、本研究会の取り組みに対して温かいお言葉をいただきました。

【会次第】

- | | | |
|----------|-----|----------------|
| 1. 開会の言葉 | 副会長 | 泰地 和幸 (胆振地区会長) |
| 2. 会長挨拶 | 会長 | 中村 淳 |

3. 来賓挨拶
全国海外子女教育国際理解教育研究協議会会長 滝 多賀雄 様

4. 自己紹介 (理事・事務局員)

5. 平成23年度事業計画 各担当者

研究・事務局・庶務・広報・会計・組織

※研究部は、研究の説明・報告の後、別室にて研究協議を行う。

6. 説明報告事項

- (1) 平成23年度 役員・事務局員・地区役員について 古里 事務局長

- (2) 第32回北海道国際理解教育研究大会 上川・旭川大会について
平成23年10月7日(金)・8日(土) 上川旭川大会実行委員長
藤崎 良二

- (3) 今後の大会開催予定地

1 十勝	2 檜山	3 札幌	4 後志	5 札幌	6 胆振	7 札幌
8 上川	9 渡島	10 札幌	11 網走	12 十勝	13 檜山	14 釧路
15 石狩	16 旭川	17 札幌	18 釧路	19 後志	20 北見	21 胆振・室蘭
22 札幌	23 十勝	24 上川・旭川	25 釧路	26 石狩	27 胆振	28 網走
29 空知	30 札幌	31 函館	32 上川・旭川	33 帯広	34 釧路	35 札幌
36 石狩	37 胆振					

- ・平成24年度 第33回大会 十勝地区 開催決定 (第10次研究 2年次)
- ・平成25年度 第34回大会 釧路地区 開催決定 (第10次研究 3年次)
- ・平成26年度 第35回大会 札幌地区 開催決定 (第11次研究 初年度)
- ・平成27年度 第36回大会 石狩地区 開催決定 (第11次研究 2年次)
- ・平成28年度 第37回大会 胆振地区 開催決定 (第11次研究 3年次)

7. 審議事項

- (1) 平成23年度「派遣教員研修会・帰国教員報告会」の開催について 類家 事務局次長

- ・平成24年1月10日(火) 札幌にて開催予定
(例年通り「理事会研修会」を午前中に実施予定)
- ・開催に伴う各地区の協力体制支援についてのお願い

8. 次期大会開催地会長挨拶 笹木 卓三 (十勝地区会長)

9. 連絡・その他

- ・全海研会費及び事務局運営金納入のお願い 福田 会計部長

※24年度事務局運営金各地区納入額確定のため、
12月1日現在の地区会員数の報告 (地区事務局長 → 道事務局長)

10. 閉会の言葉 笹森 文夫 (留萌地区会長)

総会の報告の中で、今年3月11日に発生した東日本大震災の被災者に対する義援金を予備費の中から支出し、全海研を通して被災地域へ送っていただいたという報告がありました。また、今年度より事務局運営費という形で、大会に向けて準備金を支出するという報告もなされました。

公開授業と授業別分科会

【幼稚園部会 公開授業・授業別分科会】

幼稚園年長児	旭川藤幼稚園	英語活動	活動名「好きな果物・野菜を英語で言おう」
◇園児	旭川藤幼稚園	ふじ1組(年長児)	29名
◇授業者	NPO旭川ジュニア英語支援センター代表	講師	溝口 和子
	旭川藤幼稚園	教諭	大谷 梢
◇運営・司会者	富良野市立鳥沼小学校	教諭	南雲 伸一
◇助言者	上川教育局義務教育指導班	指導主事	新居 雅人
	釧路市立音別小学校	教頭	濟藤 和彦
◇記録者	旭川藤幼稚園	教諭	高橋 萌花

【授業の様子】

講師と園児の明るく元気のよい挨拶からスタート。授業は、最初から最後まで All English で行われた。体を動かしながらのウォームアップエクササイズや「Hello Song」「Weather Song」を歌うことで、緊張を解き、これから始まる活動への期待や楽しみ、意欲の高まりが感じられた。

講師・教諭とも、どの場面においても、笑顔を絶やさず、園児達の声に耳を傾け、発話できたことを褒める場面が多く見られた。そのことにより、園児達は、さらに集中して活動に参加することができていたように思う。



また、教えるというよりも、ジェスチャー・カード・ゲームなどを通して、自然と目標としている単語や文章を発話できるような状況をつくっており、What?と食べ物の語彙の導入でも、パンの絵を見て bread、ナスを Eggplant など、難しい単語も上手に答えることができた。

「花いちもんめ」「Caterpillar game」では、学習した語彙とフレーズを使って、ゲームを楽しみながら、英語を話す姿が見られた。

最後に、「What fruit do you like?」という質問をした際には、多くの園児が「やりたい、やりたい」と積極的に手を挙げ、当てられた子も自分の好きな果物を発表することができた。活動終了時も「楽しい。」という声がたくさん上がり、次の活動への意欲が感じられた。

【分科会の様子】

アットホームな雰囲気、授業の感想を交えながら、全員が一言ずつ話した。指導者の優しい口調・にこやかな温かい雰囲気によって、園児達も説明をしっかりと聞き取ることができたという感想が多くあった。討議の中では、以下のようなことが話し合われました。

○配慮していること

- ・日本語で指示を出すと、「分からなくても教えてくれる。」となり、聞こうとしなくなる。そのため、All English で授業を行い、聞こうとする力を伸ばしたいと考えている。
- ・楽しい雰囲気をつくるためにも、誤答の子も発話できたことを褒めるようにしている。言葉は、ワンパターンにならないよう配慮する。
- ・子ども達同士のかかわり場面を必ずつくる。行うゲームは人数によって異なるが、みんなが発話できるゲームを入れるようにしている。

○英語活動は、どれくらいの頻度で行われているのか？

- ・3歳児のクラスから英語活動をおこなっている。頻度は、月1回。



☆助言者から

新居指導主事からは、体を動かしながら取り組む活動やリズムにのって行う活動は、幼稚園という発達段階を生かした人の心に触れる活動であり、子どもが楽しみながら他とかかわり、他を理解していたことが良かった。今後は、英語活動の後に、日本の本の読み聞かせなど、正しい日本語を聞かせる時間も設けてほしい。

濟藤先生からは、子ども達は、積極的に活動していた。All English の授業は難しいが、分からなかったら想像することが大切になってくる。また、担任こそ最大の環境である。そのため、子ども達を生かしていくためにも、担任のかかわりを増やしていくことが必要であると語られた。

授業公開と授業別分科会記録

【小学校部会 公開授業・授業別分科会】(小学校ESD)

小学校3年生	社会科	単元名「はたらく人とのくらし～店ではたらく人」		
◇児童	旭川市立新富小学校		3年1組	23名
◇授業者	旭川市立新富小学校		教諭	関田 恒星
◇運営・司会者	旭川市立春光小学校		教諭	辻村 和也
◇助言者	北海道教育庁釧路教育局義務教育指導班		指導主事	田中 孝二
	倶知安町立西小学校		校長	徳光 茂
◇記録者	旭川市立永山西小学校		教諭	森木 真也

【授業の様子】

教師が授業前に児童の緊張を解そうと、ゲームなどをしていたこともあり、大変明るく和やかに授業が始まった。

事前の子どもからの疑問の数を4点から3点にしたこと、プレ研でも行った巻き戻し旅のビデオの時間短縮を図ったことで、話し合いの時間を十分に保障できていた。最後まで集中した児童の様子を観ることができた。

グループでの話し合いでは自分たちがお店探検を通じて抱いた疑問を解決しようと、一生懸命に話し合いをしていた。全体の場では、活発に意見を発表し合う児童の様子が大変素晴らしかった。3年生の元気の良さと、意欲的に学習に取り組もうとする向上心豊かな子どもたちの様子から、授業者の学級経営の素晴らしさも窺うことができた。



【分科会の様子】

- ①巻き戻し旅のプレゼンが素晴らしいなど、字幕の入った巻き戻し旅のビデオや地球の映像などを利用した「子どもと地球をつなぐ教材作り」についての意見や感想、質問が多くあった。
- ②最後のまとめや取材方法、単元の目標、単元構成など、授業づくりに対しての意見や質問をいただいた。
- ③店長さんを実際に教室に呼ぶことをせず、ビデオでの登場について質問や意見をいただき、「他者との積極的なかわりを取り入れた学習場面の構成」に関して深まりある話し合いがなされた。
- ④グループで話し合う子ども達の姿に、また、巻き戻し旅などをもとにした子ども達の気付きから、「地球的な視野をもち、共に問題解決していく学習活動の構築」だけではなく、ESDとしてのあるべき授業像について協議された。
- ⑤教科の目標をしっかり押さえて授業構築を行い、そこに国際理解教育の要素を取り入れることが大切であることが確認された。

☆助言者から

田中主事からは、他者とかかわらせるという視点からの意見を、また、コミュニケーション教育という観点から、正解のないまたは経験のない話題を話し合わせる場面の大切さについてお話をいただいた。また、教えることと、考えさせることのバランスについて、社会科で求められている「観察・調査、地図資料」を多く活用していたことなどを評価いただいた。社会科に国際理解教育の視点を入れる際の要点についても確認された。

徳光校長からは、ESDについて以下のように、まとめていただいた。

- ① ESDの視点を取り入れることにより、「ESDでつちかいたい『価値観』」「ESDを通じてはぐくみたい『能力』」「ESDが大切にしている『学びの方法』」の3つの観点は、不易のものとなるであろう。
- ② ESDは、「つながり」と「未来」をキーワードに行うとよい。
- ③ ESDの授業は存在しない。授業のどこに、ESDの教育観があるのかである。
- ④ 商品の中でも農産物を本授業で扱っていたが、商品全般に広がっていきるといい。
- ⑤ 「つながり」ではなく、子どもの言葉（「関連」）でまとめたほうがよかった。

授業公開と授業別分科会記録

【小学校部会 公開授業・授業別分科会】(外国語活動)

小学校6年 外国語活動 単元名「将来の夢を紹介しよう」

◇児童	旭川市立神居東小学校	6年2組	36名
◇授業者	旭川市立神居東小学校	教諭	川村 貴弘
	JTE		フェアウェザーみさき
◇運営・司会者	東川町立東川第二小学校	教諭	岸 政継
◇助言者	北海道教育庁胆振教育局義務教育指導班	指導主事	板谷文美子
	松前町立小島小学校	校長	黒田 仁志
◇記録者	旭川市立近文小学校	教諭	清水 忠明

【授業の様子】

授業者から

この時期の6年生として、「将来の夢」について興味を抱くだろうということで設定した。

指導に当たっては、道徳の時間や学級活動の時間と関連付けた。また、発音のモデルや異文化理解の面でJTEを活用している。本時は、「英語に慣れ親しむ」という点に重点を置き、どんどん話すこと、仲間と関わることを目標に授業を行った。子どもたちは、楽しく生き生きと活動していた。自己評価では、自分ばかりでなく他者のよさにも気付いていたことがうかがえた。今後は、コミュニケーションの大切な要素である「アイコンタクト」、「ジェスチャー」、「うなづく」なども身に付けさせたい。



【分科会の様子】

①質疑

Q: 子どもの実態を教えてください。内容のハードルが低いのではないだろうか。

A: 本校では、3年生から英語にふれているがトータルとして外国語活動の学習経験が少ない。また、担任主導の学習過程を定着させるまで時間がかかった現状があるため AEEN の手法を取り入れた学習過程の中で本時のような展開を考えた。

Q: 指導計画を見ると、国際理解教育の観点からすると4時間目が妥当と考えるが、本時にしたのは、なぜか。

A: 外国語に慣れ親しんでいく過程、つまり次時につながる活動場面を公開したいと考えた。

Q: 旭川でのJTEという役割は。

A: ALTは、年8回程度でネイティブにふれる機会は少ない。本校では、退職教員等外部人材活用事業の非常勤講師としてJTEには年間35時間、5、6年生に入ってくれている。上川管内でも、町村によってALTの来校回数や活用には差がある。

②意見

- ・伝えたい、聞きたいなど「インフォメーション・ギャップ」がないと、言いたくならないし、聞きたくならないのではないか。
- ・「他の国の子どもたちの夢ランキング」と「今日のクラスの子どもたちのランキング」を出して、自分と同じ、違うなど考える活動もよかったのではないか。
- ・ピクチャー・カードでのインプットで、一息で英文をつかませているところがよかった。また、その後のアクティビティにも活かされていた。
- ・指導計画がよく練られたものだった。相互評価では、スキルの感想が多かったが、友達のこんな夢が聞けてよかったという感想もあればよかった。
- ・外国語活動に、国際理解の視点をもっと入れたらよい。今日の英語表現をもっと言いたくなるような場面を設定していくとよい。
- ・子どもと外国語をつなぐのではなく、「人と人をつなぐこと」を大切にしていくことが重要ではないか。
- ・今日の授業では、日本語が適切に使われていた。そのことで、ほとんどの子どもがついて、これだと思う。「話す必然性をどうつくるか」が大切である。

☆助言者から

板谷文美子指導主事より

- ①川村先生の英語がすばらしかった。担任は、英語を使うモデル。授業がすべて英語でなくてもよい。
- ②授業は、学級担任主導になっており、JTE との役割分担もよかった。
- ③英語ノートは、最初から扱わなくてもよい。学校によって順序を入れ替えている。
- ④本単元と道徳の時間や学級活動の授業と関連させていてよかった。国際理解の一つの視点として、「自分のよさや可能性を知る」という点がある。そういう意味でもよかった。

黒田仁志校長より

- ①国際理解教育を意識した外国語活動では、単に、英語をコミュニケーション・ツールとして身に付けるだけで終わってほしくない。「人と人とのつながりを大切する」活動の視点、教師の意識が大切である。
- ②今日の授業は、先生の技術、TT の協力がすばらしかった。ビラッシュ博士によると「B-SLIM では、成功体験を与えることを大切にしている」とある。そう考えると、今日のインタビュー・ゲームで10人とするのは、多かったかもしれない。3～5人でよかったのではないか。そうすると一つ一つのコミュニケーションがていねいな活動になったと思う。
- ③第2言語を習得しているアジア圏からも学ぶべきことがある。
- ④インプットをどれだけいいものにするかが大切。子どもたちの実態をよく把握して、どのようにサポートするかが大切である。

【まとめ】

(1) 研究内容 視点1 子どもと地球をつなぐ教材づくり

成果

- ①英語ノートの言語材料だけでなく、子どもたちから出された「職業カード」や、「他国の子どもたちの夢ランキング」を取り上げたことは、興味関心を高める上で有効であった。また、文字を用いないピクチャー・カードも有効であった。

課題

- ①異文化理解の視点、共生の視点を持ち、「人と人をつなぐ教材づくり」を目指す。
- ②ALT や JTE との連携、小中の連携を図る。

(2) 研究内容 視点2 他者との積極的なかかわりを取り入れた学習場面の構成

成果

- ①コミュニケーション能力をはぐくむ学習形態の工夫やゲームやアクティビティの大切さを確認できた。

課題

- ①パターン・プラクティスではなく、「言葉を通して、相手を知っていく」、話したくなる、聞きたくなるような必然性のある活動を設定していく必要がある。

(3) 研究内容 視点3 地球的な視野を持ち、共に問題解決していく学習活動の構築

成果

- ①B-SLIM を基本とした学習過程、道徳の時間や学級活動との関連を図った指導の有効性を確認できた。

課題

- ①コミュニケーションすることの喜びを感じられるような学習活動の構築を目指す。



授業公開と授業別分科会記録

【中学校部会 公開授業・授業別分科会】(道徳)

中学校 1年 道徳 単元名「青年海外協力隊員の生き方から学ぼう」

◇生徒	鷹栖町立鷹栖中学校	1年A組	26名
◇授業者	鷹栖町立鷹栖中学校	教諭	齊藤 悦代
◇協力者	元海外青年協力隊員 上川町立上川小学校	教諭	山田 瑞穂
◇運営・司会者	旭川市立忠和中学校	教諭	畠山 剛嗣
◇助言者	北海道教育庁学校教育局義務教育課	指導主事	遠藤 直俊
	釧路市立幣舞中学校	校長	藤原 久則
◇記録者	中富良野町立中富良野中学校	教諭	安田 千恵

【授業の様子】

元青年海外協力隊員である上川小学校の山田先生との出会いから授業がスタート。生徒の表情が良く、意欲的に話を聞いていた。

課題1では「自分のよさ」を考えて、発信することに取り組む。迷いながらも、教師2人の例を参考に一生懸命に考える姿が見られた。展開後半の課題2では、用意された3つの地域から1つを選び、「国際協力の場で自分にできること」や「仲間と協力しながら」という観点で、グループ活動を通じて考えを深めることができた。特に、課題2の発表の場面では「部活で学んだ礼儀を教えてあげられる」という、部活の学びをとらえている生徒もいるなど、いろいろな角度からの発表により深まりを感じさせた。どちらの場面でも、教師の生徒の発言への返しが丁寧であり、生徒も意欲をもって取り組むことができた。



感想用紙でも「うれしい。活躍してみたい」という記述が見られた。

【分科会の様子】



山田先生という生きた教材の活用の素晴らしさや、人とのつながりが盛り込まれた授業であることについて、多く感想が出された。

反面、そのような素晴らしい教材であるので、焦点化を図ることで、よりわかりやすかったのではないかという意見も話された。

○自分のよさなどを書かせる上での指導の工夫について

- ・難しいことを考えずに、いつもの自分でよいという意味で自分たちの例を出すようにした。
- ・帰りの学活で毎日、日直が「今日頑張っていた人」の発表をしている。

○他者との積極的なかわりを取り入れた学習場面の構成について

- ・話し合いの場面で、お互い認め合う姿が見られた。
- ・子どもが自分の内面と向き合う時間があるとよい。自分の内面と向き合うことで、他者の考えとの比較になる。

○今後の課題について

- ・意見をまとめる場で「一緒に〜」に強調した例示を行ったが、今の段階では、生徒は「自分は〜」の一方向であり、今後は「一緒に〜」となるように授業を考えていくことが大切である。
- ・主題構成については、総合、特活など、関連を図って授業を構成していくことが大切である。

☆助言者から

遠藤指導主事からは、授業が道徳のねらいをふまえたものか、生徒自身が価値をどのようにとらえ、葛藤し、実現していくのが大切であること、評価を指導案に位置づけることの大切さが語られた。

また、藤原校長先生からは、自信がもてない生徒が増えている中、このような授業で自信をつけることの大切さが話された。

授業公開と授業別分科会記録

【高等学校部会 公開授業・授業別分科会】(国際事情)

UL コース 3年 単元名「女性差別」

◇生徒	旭川藤女子高等学校	3年	16名		
◇授業者	旭川藤女子高等学校	教諭		山崎	征代
		教頭		谷島	久雄
◇運営・司会者	富良野市立扇山小学校	教諭		田畑	幹夫
◇助言者	北海道立教育研究所附属情報処理教育センター	研究研修主事		辻	広美
	岩見沢市立美園小学校	校長		石塚	信彦
◇記録者	上富良野町立上富良野小学校	教諭		福島	里香

【授業の様子】

挨拶に続き最近のニュースに関する話題が教師から提供される。話題に対して生徒からざっくばらんなつぶやきを交え意見が述べられた。少人数だからこそあたたかい雰囲気が感じられた。

前時のまとめの確認のあと、早速「女性差別」のプレゼンが行われた。多くの分野で男女平等が進んでいて高レベルの福祉制度が整っている北欧の男女平等についての発表。専門職と技術的専門職の比、重役と官僚の比率、女性議員の比率、収入の比率をグラフや表を使って視覚的に表示。男女共同参画社会は、多くの支援システムから成り立っていることを知り、男女の平等は幸福をもたらすのだろうか？という質問で締めくくられた。

プレゼンを受けての話し合いでは、課題や問題点について、情報を共有しながら意見の交換がなされた。全て英語で行われた1時間だったが、生徒の英語能力の高さと自分の考えを臆することなく話せる温かい雰囲気が感じられた。



【分科会の様子】

生徒が自分の考えや意見を生き生きと英語で交換する姿は、英語を話せる日本人を目指す今年度からはじまった外国語活動のゴールであるべき姿だという感想が多くあった。話し合いでは、次のようなことについて意見が出されていた。

- 教師の役割
 - ・ あくまでファシリテーター兼アドバイザー（教育者としてのサポート）
 - ・ つけたい力を見据え、スモールステップの指導
- 英語力をつけるために
 - ・ 英語のシャワーをあびさせる。
 - ・ 自分の考えを大切にし、簡単に考えを変えない。
 - ・ のびていく のばしていくためのしかけ（教材開発）
 - ・ 国語や他の教科 広い視野の育成（積み重ね）が必要



など多数

☆ 助言者から

助言者の辻研修主事からは、授業のスタンス（教師はいつでもサポーター）、生徒が選んだテーマを自分のものとして共有する雰囲気、インプットしたものを表現 ゴールが明確、世界から自分たちへリンク（家での問題）、発音・プレゼンのやり方→技術力のアップ・本物の教材を自分たちで調べるなど、ULコースについての素晴らしさが語られた。

また、石塚校長先生からは、ステレオタイプの考えになりがちな授業だが、自分たちの考えを押し付けず、子どもたちの考えや生き方を大切にするという、国際理解の本来の目的が話され、改めて自国の文化や言葉について考えさせられた。

課題別分科会記録

【第1分科会】

地球からの発信、仲間と共に行動する姿を求める国際理解教育の実践

◇運営者	旭川市立知新小学校	教諭	山名 正記
◇司会者	函館市立中央小学校	教諭	三品 充子
◇助言者	北海道教育庁釧路教育局教育支援課義務教育指導班	指導主事	田中 孝二
	帯広市立大空中学校	校長	笹木 卓三
◇記録者	天塩町立天塩中学校	教諭	籾山 明久

1. 提言の概要

- ①「学校給食を窓口に、仲間と共に行動化する国際理解教育の実践」
札幌市立元町小学校 教諭 小松 裕和
《代理報告：札幌市立丸山小学校 教諭 菅野 英人》
- ②「ESD（持続可能な開発のための教育）を射程とした『道徳の時間』
授業実践の概要と今後の課題」
釧路市立景雲中学校 教諭 福田 貴志



2. 研究協議

(1) ①の実践について

Q：実践のねらいを教えてください。「行動化」そのものがねらいなのか。

A：行動化・実践力を重視している。本授業を足掛かりに世界に目を向けるということが求められる。牛乳に焦点化した、「食」を窓口に世界を意識するというのが、子ども達に求めたいものであった。身近なことから世界へ。

Q：前段として日本がどれほど無駄をしているかを知識として持っておいてから、本時に入るともっと効果的だったのではないか。

(2) ②の実践について

Q：ESDの実践に対する他の先生方の反応はどうだったか。

A：校内で意識的に広めているわけではないので、「ESDとは何だ？」と思っている先生方は多いと思う。

Q：ESDはイデオロギーにかかわるという部分について詳しく教えてください。

A：ESDについては、既存の実践の上に立つというのはもちろんだが、意識改革を促すという面ではそれでは不十分。新しい枠組みを作っていく必要がある。

Q：「射程」という言葉の意味は？

A：国際理解教育に軸足を置いて、ESDの目標・内容を実現していくべきであると思う。

Q：ESDは自主・自律にとらわれず、多くの内容項目にかかわると思われるが、あえて自主自律として取り上げられた理由は？

A：ESDと道徳の4つの内容項目は関連する。学級の実態を授業構想の背景に置いたため、自主自律を取り上げることとなった。しかし、個人の価値観の変革を促せばよいというわけではないと考える。

3. 指導助言

<田中孝二指導主事>

教育課程上にどう位置づけるかが重要。そのための働きかけをすることが必要。生きる力を養わなければ日本が危ない。「自分で稼ぐ子ども」「自分で働く子ども」「税金を払う子ども」がキーワード。各教科分科会でも評価されるような実践を積み重ねてほしい。

<笹木卓三校長>

【菅野報告について】

入り口と出口が明確な実践であった。地域から世界へという、国際理解が求める実践であった。近視目標から行動目標へという動きが重要。

【福田報告について】

我慢することに幸あり。困ったときに我慢できるかが子ども達は問われている。道徳の時間はわかっている小さなことがより大きくなって終わればよい。葛藤を経て価値観が徹底されることが重要。「いつでも どこでも 誰でも」という言葉は子ども達に使うべき。私達には知らないことがたくさんある。知ることによって心が揺り動かされ、行動を変えようと思う。そのことが地球につながっている。

課題別分科会記録

【第2分科会】

国際交流や国際協力を通じた国際理解教育の実践】

◇運営者	岩見沢市立北真小学校	教諭	越山 真史
◇司会者	倶知安町立西小学校樺山分校	教諭	長谷川 徹
◇助言者	北海道教育庁学校教育局義務教育課 別海町立別海中学校	指導主事	遠藤 直俊
		校長	飯田 輝雄
◇記録者	札幌市立石山中学校	教諭	西山 昇

1. 提言の概要

①「観光都市における国際理解教育の授業づくり」
登別市立登別小学校 教諭 寺沢 圭司

②「セネガルだよ。全員集合！」
北見市立常呂小学校 教諭 有路 直人



2. 研究協議

(1) ①の実践について

Q：生活科の目標との合致という観点から配慮した点は何か。また、ルールの違いに気づかせた後、その後の発展的な取り組みなどはあったのか。

A：生活科の目標と合致させるためにも、身の回りへの気づきを大切にしてきた。比べて考える範囲を外国に広げてよいのか、2年生の力に適した内容なのかなど、内容や目的をもう一度見直し、地域よさをしっかり捉えさせたい。その後の取り組みとしては、登別の中心である幌別で、外国語の表示がないことを確認し、登別市の温泉地、観光地としてのよさを確認し、新聞のまとめを行った。留学生との異文化交流も行ったが、ヨーロッパ系の人達だったので、地域を訪れてくるアジア系の人達とは違い、発展的学習とは言えなかった。

Q：地域の人達とのふれあいはあったのか。

A：商店街には生徒達の知り合いがおり、インタビューを行い交流した。

(2) ②の実践について

Q：寺沢先生は具体的資料を上手く使い、実際に見るといことが、子どもに大きなインパクトを与えている。有路先生は、白黒写真の現地の子ども笑顔が素晴らしく、子どもにインパクトを与える。お二方とも、比較しながら投げかけることと、多くの情報から視点を絞っていく手法がとても有効である。

A：写真でいい笑顔を取るためには、アフリカの人達と仲良くならなければならない。

Q：有路先生の実践は、写真に感動した。一枚の写真に子ども達の視点をとどめ、じっくり見せることの有効性や、国際理解が子ども達を幸せにすることを確信した。話をうかがい、温かい気持ちになることができた。

A：学校では、3年生の題材にある、絵文字で表示する取り組みやポスター制作を通じて、一目でわかる表示を制作させる活動を行っている。

3. 指導助言

<遠藤直俊指導主事>

寺沢先生の提言で課題としてあげられていたことは、他の教科等において国際理解を扱う際においても、本来の目標を達成しているかを、まず考えるべきである。例えば、総合において国際理解を行う場合に、ただ国際的なものを見せるだけでは深まりはない。総合的な学習の時間としての探求活動になっているかを考えなければならない。

外国での様々な活動をしてきた人達の知識や経験を個人の中に埋もれさせてはいけない。国際理解教育の指導のねらいや意図を外国経験者がリーダーシップを取って、教材化していかなければならない。その際には、人材ネットワーク作りや関係機関との連携も大切である。

<飯田輝雄校長>

国際理解教育が、知るだけの教育に終わっているという反省がある。国際理解教育は、子ども達自身の発見、活動に拠るところが大きい。その特色を最大限に生かし、我々は子ども達に様々な能力を身に付かせながら、争いや紛争をなくしていく真の人間理解教育を行っていかなければならない。北海道のそれぞれの地域に、それぞれの特色がある。外国人に日本のルールを知ってもらい、互いを知り、相手に親切にして、身近なところから平和教育につなげていきたい。その際には、是非とも異文化理解に音楽、におい、触覚など五感に訴える方法を取り入れてもらいたい。

内向きの若者が増えていると言われる昨今、これからの世の中に必要な“冒険心”の育成は、国際理解に期するところが大きいと言える。

課題別分科会記録

【第3分科会

外国語活動を通してコミュニケーション能力をはぐくむ国際理解教育の実践】

◇運営者	札幌市立澄川小学校	教諭	二ツ山 徹
◇司会者	石川市立南線小学校	教諭	宮浦 匡典
◇助言者	北海道教育庁上川教育局義務教育指導班 訓子府町立訓子府小学校	指導主事	新居 雅人
◇記録者	福島町立福島小学校	校長	吉田 寛
		教諭	三浦 将大

1. 提言の概要

①「体験を通じた英語学習の授業実践」
帯広市立帯広第二中学校 教諭 水谷 由美

②「いつでも」「どこでも」「だれにでも」できる外国活動の実践
旭川市立新町小学校 教諭 太田 貴幸



2. 研究協議

(1) ①の実践について

Q：授業をしたことが英語科でどう反映されたか。またコミュニケーション能力の向上にどう効果的であったか。

A：コミュニケーションは「運用」＋「態度」が重要だと考えている。このことが「伝えたい」「話したい」につながると考えている。英語科での授業では、言語能力の向上を目指しているが、それだけでは「伝えたい」になりにくい。そのため、今回の提案にある授業を構築した。生徒は英語を話すことに抵抗感はなくなってきており、態度面の向上につながっている。

(2) ②の実践について

Q：校内の体制づくり、児童の実態に合った授業づくりの大切さがわかった。理論を踏まえつつ活動を工夫することで児童は変わってくる。活動を工夫していることについて教えていただきたい。

A：同じ活動を繰り返すとあきてしまう児童もいるが、心理的なことから繰り返し活動している。教師側がたくさん引き出しをもっていることも大切である。勝負にこだわりすぎないことも大切だと感じている。

3. 指導助言

<新居雅人指導主事>

2日間の授業実践、分科会、研究協議を通じて、すべての子どもが一人の日本人として、自分の生活している地域と地球上の出来事を結び付けながら、様々な人々となることができるよう道内の多くの学校で優れた実践が行われていることを学んだ。特に、水谷先生の実践からは、他国の文化や生活について、子どもが自分事として考えることができるようにするために、教材教具の工夫が如何に大切かを学んだ。太田先生の実践からは、外国語活動の充実に向けて全教職員による研修を継続して行ったり、先生方が協力して教材を作成したりするなど、組織的に授業づくりに取り組むことの大切さを学んだ。国際理解教育は、様々な教育活動の中で実践していくことになるため、全体計画を作成するとともに、各教科等の指導計画の中に国際理解教育との関連を明確に示すことが大切である。国際理解教育が、指導計画に基づいて確実に実践されることを期待している。

最後に、北海道の子どもは、全国に比べると「自分にはいいところがある」「将来に夢や希望がある」と思っている割合が少ない。国際理解教育を通して、他とのかかわりの中から自分のよさに気づき、自分の可能性に自信をもち、将来に夢や希望をもつことができるよう子どもたちを育ててくれることを期待している。

<吉田 寛校長>

自分の経験から、体験的な学習が続いていくことで、感覚的に言語がでてくるようになる。私の場合は、言語を使うことができる場があった。つまり、習ったことを使わせる場が必要である。日本人は、考えながら話す。一方、外国人は話しながら考える。このことがコミュニケーションのスタイルの違いとして表れている。日本的なコミュニケーションスタイルは、国際的な場では不利になる。積極的にコミュニケーションをとる態度を小さいころから養う必要がある。

水谷先生の提言からは、英語活動への意欲づけ動機づけの必要性をあらためて感じた。このことが、能力の向上や「話したい」「伝えたい」という思いをもたせることにつながる。

太田先生の提言からは、言語や文化を体験的に学ばせるためには、教材の工夫が必要であることがわかる。外国語活動は、人と言葉でかかわる楽しさを味わわせるために、話したいという思いを持たせる教師のはたらきかけや、場の設定が重要である。